慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	飯島幡司著 社会問題の根本観念
Sub Title	
Author	
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.3 (1913. 7) ,p.620(204)- 621(205)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130710-0204

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論、歴史及び現情の三部に分ち、緒論に於て投機取引の意義を説明して投機と賭博との異同を示し、投機の目的物が具備す可き三個の要件を擧げ、次に投機市場投機取引の效用及び投機業の發展を論ず。第二、歴史の部に於ては德川幕府時代の米穀取引所の發達と盛衰を論じ、且維新以後に於ける米穀幷に他の商品及株式取引所の發展を説くこと詳なり。第三、現情の部にて取引所の構成、投機賣買の慣用手段を論述し、最後に取引所の營業に關する有益なる統計を掲ぐ。

取引所繼續問題の喧しき今日吾人は取引所論の大家の筆に成る此好參考書を得たるを祝し、且つ著者の勞を多とせざるべからず。吾人は取引所政策論を載する本書の下卷が一日も早く上梓せられんことを渴望して已まざるなり。

飯島幡司著 **社會問題の根本觀念**

大正二年五月寶文館發行
菊判三百七十頁定價金壹圓貳拾錢

既に過ぎ去りたる十九世紀は人類の經濟的生活の大發展時代たると同時に科學の全盛時代たるの觀ありき。然るに其末葉に至りて佛國の哲學者ベルグソンは一新思想を皷吹せるに大に世人の歡迎する所と爲れり。世にベルグソンの哲學として知らるゝもの卽ち是れ也。氏の哲學は要するに宿命論を根柢より否認するものにして科學の權威に對する一の反動として起れる思想に外ならず。而して宿命論は嚴密なる科學的見解を前提とせるものにして從て科學的立脚地よりしては如何なる詭辯を弄するも之を否定すること能はざると同時に、ベルグソン主義は科學上何等の價値を有せざるものなりと云ひ得べし然かも世人が此主義を目する猶ほ旱天に雲霓を望むが如きの觀あるは何故なるか。蓋し精緻嚴正なる科學的推論は幼時より推理的思索の經驗を有せざる者をして漸やく倦怠を感ぜしむるに至れるを以てなるべし。

而して今や此新思想は歐米の思想界を風靡し終に我國を侵し、既に多くの歸依者を生ずるに至り、多少洋學を衒ふ者口を開けばベルグソンを語らざる者なきの有樣にして、曰くベルグソンの哲學と教育、曰くベルグソンの哲學と何々などゝベルグソンを基礎として種々の社會問題を論ずることは一世の流行たらんとせるが如し。

吾人が此處に紹介する飯島氏の『社會問題の根本概念』は卽ち此流行の產物の一なりとす。本書は神戸高等商業學校教授津村秀松氏の編纂に係る國民經濟叢書の一にして、其第一冊は大西猪之助氏著『商國主義論』なるが本書は其第二冊なり。著者は先づ筆を社會問題の根本原因に起し社會階級、社會問題の發展を論じ轉じて此社會問題の解決に關する學説、卽ち個人主義、社會主義及び社會改良主義をばベルグソン式哲學の立脚地より評論して社會改良主義を以て最善の策なりとの結論を與へたり。行文流暢玲瓏、加ふるに活氣あり。

何事もベルグソン化するは一世の流行たらんとする傾向あるは既に述べたるが如くなるも、我國に於ける社會政策のベルグソン化は吾人の知る所に據れば本書を以て最初の試みと爲す。吾人は著者の創見と大膽とに敬服せざるを得ず而も是れ本書の長所たると同時に短所なるぞ是非なけれ。著者は深くベルグソンの哲學を討究するとなくして此哲學を根據として、立論せるの結果往々牽强附會の説に陷るの虞あり。殊に社會改良主義を以てベルグソン主義と一致せるもの也と論せるの一項を以て然りとす。ベルグソンは自然の科學的研究を是認するも人生の科學的研究を否定せる也。而も社會改良主義は人生の科學的研究に其基礎を置くものなりとす。

然りと雖も斯る批評は或は盥蠅的なるべし吾人は社會問題に趣味を有する讀者に對して本書は一讀の値あるものとして推擧するを辭せず。